能代北高跡地のワークショップニューズレター

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School and the future of Noshiro City

Vol.7

Newsletter

実証実験プロジェクト、第3弾！

「北高跡地でイロイロしてみる」

後編

アーカイブはこちらから
NPO法人アーツセンターあきた
#北高跡地利活用

能代北高跡地利活用の可能性を探る実証実験プロジェクト

能代北高跡地が2014年3月に秋田県から能代市に譲与されて9年余り。利活用についてはこれまで複数の提案や意見があり、周辺の商店街を含めたつながりを考慮して検討することが必要とされてきました。秋田公立美術大学では2020年度に基礎調査を実施し、実験的な取り組みを続けることで中心市街地活性化に向けた機運を醸成する思考継続型プロジェクトを提案しました。2021年度のワークショップを踏まえ、2022年度には実証実験プロジェクト「北高跡地で宿泊してみる」「北高跡地で展望してみる」を実施。2023年度は「北高跡地でイロイロしてみる」を開催し、1日目は北高跡地を起点に歴史と文化をめぐるツアーを、2日目は北高跡地を会場にイロイロな試みを楽しみました。ニューズレター Vol.7では2日目の様子を報告します。（企画・運営：秋田公立美術大学）

北高跡地利活用に関する能代市のウェブサイトはこちら

実証実験スケジュール

5つのプロジェクト〈北高跡地に宿泊する〉〈北高跡地でスタートアップ〉〈北高跡地で展示する〉〈北高跡地でつくる〉〈北高跡地で展望する〉のなかから、2023年度は〈展示する〉〈つくる〉にクローズアップしました。プロジェクトの内容はアーツセンターあきたのウェブサイトでもご覧いただけます。

第1回 実証実験プロジェクト「北高跡地で宿泊してみる」
日時｜2022年9月24日（土）14:00〜25日（日）11:00

第2回 実証実験プロジェクト「北高跡地で展望してみる」
日時｜2022年11月20日（日）11:00〜15:00

第3回 実証実験プロジェクト「北高跡地でイロイロしてみる」
【1日目／歴史・文化訪問ツアー】
日時｜2023年10月14日（土）10:00〜16:30
【2日目／産業・農作物体験】
日時｜2023年10月15日（日）10:00〜14:30

第3回 実証実験プロジェクト
「北高跡地でイロイロしてみる」2日目

「能代の産業・農産物体験」

日時｜2023年10月15日（日）10:00 〜 14:30
場所｜能代北高跡地（能代市追分町1-36）

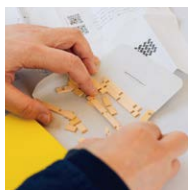
キット協力：株式会社大栄木工
お 茶 協 力：茶誠堂
食 材 協 力：Sun農園

- **プロジェクト** Project
- **技術的検討** Technical Study
- **ワークショップ** Workshop

創造的な意見交換を行う「ワークショップ」と、ワークショップで出たアイデアを専門的な視点から検証する「技術的検討」を繰り返し、実施可能な「プロジェクト」を考えていきます。

2021年度以降の検討イメージ▶

［プログラム］
9:45 集合・受付
10:00 オープニング
10:15 組子細工講座＆体験
11:30 檜山茶講座＆体験
12:30 能代ネギ焼きBBQ
14:00 振返り・アンケート

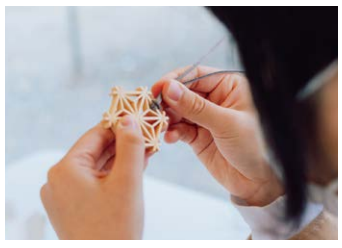


指先と味覚で感じる能代の魅力

2021〜2022年度に実施した「北高跡地の利活用を検討するワークショップ」では、能代の特産品が味わえたり、伝統工芸を紹介する講座やワークショップを体験できる場にしたいというアイデアも出ました。そこで実証実験プロジェクト第3弾「北高跡地でイロイロしてみる」2日目には、能代の産業や文化、農産物に触れる体験を企画。数ある特産品のなかから組子細工のワークショップ、檜山茶講座、能代ネギ焼きBBQを実施しました。ワークショップでは、伝統建具に使われる組子細工の職人の技を体験してみることを、檜山茶講座ではその歴史や味わい方をゆっくりと、ネギ焼きBBQではネギをさまざまな食材と掛け合わせて。指先と味覚を使って、能代の特産品の楽しみ方を北高跡地で試みました。

伝統建具の組子細工を慎重に、美しく

明治時代に「東洋一の木都」と称された能代市において職人技として知られているのが組子細工です。鉄製のネジやクギは一切使わず、0.1mmのズレも許されない技で製作される組子細工は、伝統的な模様の幾何学的な美しさと木の温かみが特徴です。〈つくる〉をひとつのテーマとする第3回目のプロジェクトでは、株式会社大栄木工の組子体験キット（麻の葉／ストラップ）を用意しました。湊哲一さん（ミナトファニチャー）指導の下、ベイヒバの香りと質感を鼻と指先で感じ取りながら麻の葉の模様を組んでいきます。解説書通りに組み立ててみても、はめていくには慎重さが必要。力技では決してできない奥深さの体験に夢中になって取り組む参加者の姿がありました。



檜山茶の茶葉と茶花と、茶ようかん

その後、北高跡地に吹き込む強風を防ぎながら、能代の名産・檜山茶の講座と体験をおこないました。講師は和カフェ月（ゆえ）の佐藤さつきさんです。
檜山茶は江戸時代中期、檜山地域を治めた多賀谷峯経が京都宇治から茶の実を取り寄せ、檜山の山城の一角に自家用茶園を作ったのが始まりと伝えられています。その後、天保の飢饉の際には武士の内職として奨励され、檜山一帯で茶栽培と製茶が盛んになりました。昔ながらの手摘みと手揉みの製法を守り続け、無農薬で栽培される檜山茶の茶園は現在2軒だけとなりました。
佐藤さんが用意してくれた重箱には、檜山茶を使った茶ようかんと檜山茶の花。茶香炉に火を灯すと茶の香りが漂い始めます。手揉みの煎茶は、湯温70°という低い温度でゆっくりと抽出します。「薄い茶の色、旨味、渋味が徐々に広がって、味わい深い煎茶」と佐藤さん。茶ようかんにトッピングした茶花は二煎目のお茶に入れてフレーバー煎茶として、茶殻はお浸しとしてほのかな香りと味わいを楽しみました。

能代ネギ焼きBBQ!!

お昼は、能代特産のネギをどうやって堪能するか、それぞれがアイデアを出し合いながら楽しむバーベキューです。能代市のウェブサイトによると、能代のネギの特徴は「白いところが多い根深ねぎで、太くて軟らかく、辛味はスッキリ」とのこと。「辛味は煮込むとまろやかな甘味へと変化し、蕎麦や冷奴の薬味のほか、能代名物だまこ鍋、しょっつる鍋などの鍋物にも欠かせません。能代のねぎは、煮ても焼いても、生でもおいしいねぎです」とあります。バーベキューでは、炭火で焼いたネギをコッペパンに挟んでいろいろな味をトッピングしたり、アヒージョにしたり……。どのような味との掛け合わせにも、意外に馴染むことを発見。青い部分も味わい深く、ネギの万能食材としての力を堪能したバーベキューでした。地域の方々と秋田公立美大の学生が入り混じり、北高跡地の一角が賑わいを見せたひとときでした。

秋田公立美術大学は2020年度に実施した基礎調査をもとに思考継続型プロジェクトを提案。創造的な意見交換をおこなう「ワークショップ」と、専門的な視点からアイデアを検証する「技術的検討」を繰り返し、実証実験プロジェクトをおこなってきました。実験的な取り組みのなかで大切にしてきたのが、参加者からアイデアをいただくこと、それらをもとにプロジェクトに取り組み、検討していくことでした。これまで4回のワークショップと3回の実証実験をおこない、そのなかでたくさんのアイデアとたくさんの思いを受け取ってきました。「北高跡地でイロイロしてみる」でも、各地の文化財をめぐり、北高跡地での講座やバーベキューに参加した方々からさまざまなご意見・ご感想をいただきました。アンケートからピックアップします。

◉訪問先で具体的な説明をしていただき、とても参考になった。素晴らしい歴史が能代にあることを強く感じた。
◉古い文化的価値が失われていく危惧を感じた。それを守る人々との接点を多く持ちたい。
◉ガイドさんがいないと、どんな歴史があり、どんな場所なのかが分からない。このようなツアーがないと足を運ぶことは難しいだろうと思った。
◉北高跡地に展示室があったら、今後保管（保存）が困難になり、無くなる恐れのある文化財等の展示があればいい。
◉北高跡地では歴史や文化をまとめた写真や映像などを展示し、現地へ行きたいと思えるような内容にできたらいい。
◉能代の歴史に関わるものをカテゴリーにこだわらずに多方面から知る展示をして、地元以外の人も楽しめるものであればいい。
◉能代に限らず、秋田県全体で活用できる場所であればいい。
◉能代の文化の核となる施設を要望。ただし可能性を実験する小規模でもいい。
◉イベントができる公園にして、ワークショップをしたりゆっくり過ごせる多目的な場所をいろいろな木材を使って整備すると面白いのではないか。
◉小学校の行事等の際には駐車場として利用できる状態にしておくのはアリだと思った。能代に住んでいても檜山茶のことをあまり知らない人もいるので地域の人が参加できるワークショップが開催できる場所であってほしい。
◉能代に住んでいるがこういった形で地元を体験できるのは新鮮だった。
◉檜山で茶畑を見学して、翌日に北高跡地でそれを味わう体験ができて説得力があり、充実していた。檜山茶を体験できるカフェスペースがあればいい。

※ワークショップや実証実験プロジェクトなどの様子やアンケート詳細は、アーツセンターあきたのウェブサイトでご覧いただけます。

自分たちの未来に本当に必要なものはなにか。思考の過程を積み上げてつくりあげる公共事業に。

小杉栄次郎／秋田公立美術大学景観デザイン専攻教授

2020年度の能代北高跡地利活用基礎調査業務を経て、2021年度から3年間かけて、北高跡地利活用の可能性を探る市民ワークショップ（以下WS）を行ってきました。基礎調査業務の報告書をまとめた能代北高跡地利活用スタートブック「これから、ここから」を手掛かりにして、1年目はこの土地の活用方法や能代の将来を見据えた時に求められる機能などを、多くの市民と共にディスカッションし、2回にわたり深掘りされた全ての意見を整理しまとめたものが、5つの実践型WS案でした。その後の2年間は、この実践型WSを市民の皆様に参加いただいて開催し、その都度、能代北高跡地の可能性について議論してきました。世界的に猛威を振るった新型コロナの感染拡大時期とちょうど重なったこともあり、参加者数としては満足のいく数字とはなりませんでしたが、WSに参加いただいた市民の皆様からのさまざまなご感想やご意見は、この土地を活用していく上での貴重な資料となるものでした。能代北高跡地利活用の解像度が上がっただけでなく、能代市中心市街地や能代市全域との関連のなかで場所の議論ができたと思います。一方で、まだまだ多くの市民の関心や意見が必要であることも浮き彫りになったように感じました。北高跡地利活用や能代市の未来を自分たちの問題として考えるきっかけとしても、さらに多くの市民、特に中学生や高校生などの若い人たちも含めた議論や活動が望まれます。

近代以降に整備されてきた公共施設では、サービスを提供するのが行政であり、享受するのは市民であると設定され、それが当然のように思われてきました。しかし「縮小の時代」に突入している現代社会では、この構図は財政的にも人材的にも立ち行かなくなるのは明白であり、その構造を解体し、行政と市民の協働によるサービスの在り方を模索し、構築しなければならない時代にきています。そしてそのためには先ず、高度経済成長期を経て確立されて固定化されている公共事業の決定プロセスを見直す必要があると考えます。他地域の先行事例などを根拠に規模と機能を行政主導により早急に定めた上で、最短の期間で施設を計画し建設まで進めるやり方は、施設整備において「建設する」という点においては、最も効率がよかったのかもしれません。ところが、その公共施設の完成後から先もずっと街のために機能し続けて、市民に愛され続けるような持続可能性を持ち得るのかという視点で考えると、これまでのやり方は必ずしも最適な方法ではないことがわかっていただけるのではないでしょうか。**思考継続型プロジェクトは、「自分たちの未来に本当に必要なものが何か」を議論する場に市民が参加する時間を徹底的に増やし、実証実験などの試行錯誤を行政と専門家を交えて繰り返すことで、その思考の過程を積み上げることでつくりあげる公共事業の計画プロセスです。このプロセスを経て生み出される「場所」は間違いなく、市民に愛される持続可能な公共空間となることでしょう。**スタートブックのあとがきで記した内容と重複しますが、改めて書き記します。

最後に、WSにご参加いただいた方々、そしてこのニューズレターを手に取り能代北高跡地のこれからに関心をもってくださった方々へ、深く御礼申し上げます。

使いながら考える現在の動きを、どう展開していくのか。思考継続型プロジェクトは、まだ始まったばかりです。

井上宗則／秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授

現在の都市計画は、大規模な計画を推進するための戦略的（ストラテジック）な手法が主流となっています。この手法は、生活に必要な機能の整備においては有効に働きましたが、必ずしも生活の豊かさを担保するものではありませんでした。そこで、**近年小規模なプロジェクトの実践により戦術的（タクティカル）に都市を変えていく「タクティカル・アーバニズム」と呼ばれる動きが、世界各地で注目されています。**北高跡地を舞台にこれまで3年間進めてきた思考継続型プロジェクトは、このタクティカル・アーバニズムの考えを応用し、生み出したものでした。

能代市は、他の多くの地方都市と同様に、少子高齢化に伴う人口減少や厳しい財政状況といった難題に直面しています。現状の公共施設を維持できるだけの財源は見通せず、財源不足を補うために2046年度までに公共施設の床面積を35%削減するという計画も公表されています。こうした状況下で新たな建物をつくって適切に維持管理していくことは、至難の業です。だからといって、「何をしても無駄だから…」と傍観していては、まちはどんどん衰退していきます。昔ながらのハコモノに一縷の望みを託すのでもなく、諦めの境地に至るでもない、第3の道を模索するために、2022年からの2年間、北高跡地の活用のあり方を"使いながら考える"実践型ワークショップを繰り返しました。

ワークショップは毎回異なる内容でしたが、いずれのワークショップにおいても、少なくない参加者が自身の利活用に関するアイデアと北高跡地の空間的な広がりとのミスマッチを感じているようでした。地図で得られる中心市街地の空地という情報と、その場に身を置くことでしか得られないスケール感との間に乖離が生まれ、この乖離が北高跡地をどのように活用すれば能代のまちが活気づくのかという思考のエンジンになっていました。北高跡地を"使いながら考える"ことは、第3の道の模索へと確実につながっており、参加者からは、北高跡地をきっかけにしてこれからの能代に対する生産的な意見が多く出されました。その光景は、**思考継続型プロジェクトには、ゆっくりではあっても着実にまちを変えていく力があると強く実感させるものでした。**

北高跡地に固定的な機能を与える"土地利用"は、まだ何も始まっておらず、その答えも出ていません。ただ、これまでの活動を振り返ってみると、さまざまなテーマで実施してきたワークショップ自体が北高跡地の活用の一形態だったのではないでしょうか。そのように考えると、「6の市」や臨時駐車場など、既に北高跡地は活用されていることに気づきます。「跡地をどのように活用するのか」という問いは戦略的な都市計画の呪縛でした。**北高跡地は既に活用されているという視点に立てば、この動きをどのように展開するのかという課題が浮上してきます。思考継続型プロジェクトは、まだ始まったばかりです。**

実際に土地を使いながら、土地の利用方法や価値を見つけ、体験を共有していく。

石渡雄士／秋田公立美術大学景観デザイン専攻助教

今年度からプロジェクトに加わり、実証実験第3弾「北高跡地でイロイロしてみる」の2日間に参加しました。

初日は歴史・文化訪問ツアー。私は檜山地域のコースに同行しました。檜山地域を訪れると丘陵地に囲まれた田園風景が広がり、一見すると何もないのどかな場所といった印象を受けます。ですがこの地域は文化財や史跡が多く集まる場所であり、実際に現地を訪れ目にすることで、この地がかつては軍事や政治の拠点として栄えた場所であったことを実感しました。檜山地域を巡ることで文化財は市内の各所で保管され、人々によって受け継がれてきた歴史があることが分かりました。そして市内の文化財を1カ所に集約する施設として昨年に整備されたのが最後の訪問地、文化財資料収蔵庫（旧朴瀬小学校）です。この施設の誕生により能代市の文化財を取り巻く状況が大きく変わろうとしています。今回のツアーによって文化財の保管の現況と今後について知り、どのような場所でどのように展示することが望ましいのか考えていく段階へと繋げていければと思います。

2日目は北高跡地で能代の産業・農産物を体験しました。ワークショップでは組子細工と檜山茶の講座&体験、能代ネギBBQを参加者と楽しみました。体験することでより深くその魅力や面白さを知るだけでなく、自分と対象との距離が縮まり身近な存在として感じられたことがよかったと思います。能代市には他にも歴史や文化、自然を体験して楽しめる地域資源がたくさんあります。今回の取り組みによって北高跡地がもつ可能性をまたひとつ切り開けたのではないかと思います。**今後も北高跡地を実際に使いながらこの土地の利用方法や価値を見つけ出し、多くの人たちと体験を共有しながら敷地の利活用を模索していく取り組みが必要だと感じました。**

北高跡地利活用の可能性を探るワークショップのこと、実証実験のこと、このニューズレターのことなどはアーツセンターあきたまでお問い合わせください。

プロジェクトメンバー
小杉栄次郎（秋田公立美術大学景観デザイン専攻教授）
井上宗則（秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授）
石渡雄士（秋田公立美術大学景観デザイン専攻助教）
田村剛（NPO法人アーツセンターあきた）
高橋ともみ（NPO法人アーツセンターあきた）

お問い合わせ先：
NPO法人アーツセンターあきた
☎ 018-888-8137

能代北高跡地のワークショップ
ニューズレター「これから、ここから。」Vol.7
2024年3月発行
発行　公立大学法人 秋田公立美術大学
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3
TEL.018-888-8100
※能代北高跡地利活用可能性検討業務の一部として作成しています。
デザイン：越後谷洋徳　写真：伊藤靖史　編集：高橋ともみ
制作：NPO法人アーツセンターあきた